

近世琉球弧における島嶼型風水の展開 一八 重山諸島の村落風水を事例として一

内原, 英聡

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

70

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

81

(発行年 / Year)

2013-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008643>

近世琉球弧における島嶼型風水の展開 —八重山諸島の村落風水を事例として—

社会学研究科 社会学専攻
国際日本学インスティテュート
博士後期課程3年 内原英聡

はじめに

1. 琉球・八重山諸島の「風水」に関する先行研究

2. 島嶼型風水の特徴

「身土不二」の観念／「気」の概念の重視／主格が問われる現在の「環境アセスメント」／琉球における風水の受容／村落風水の特色／クサティ（腰当）と抱護の情（ほうごのこころ）／多良間島の抱護（抱護林）

3. 八重山諸島における「風水」の展開

地理的な位置／石西礁湖／タンゲンとヌンゲン／八重山に残る風水史料／八重山「村落風水」の関連年表／『北木山風水記』について／『北木山風水記』にみる石垣四カ村・風水の共通項目（新川村を基準として）

おわりに

引用・参考文献

はじめに

「フンシ」とはなにか。宮城信勇の『石垣方言辞典』には、この語句について次の解説がなされている。

風水。家相、地相など。「風水」は、陰陽家の術の一つで、風土や水勢を見て住居、埋葬の地などを選び定めること。「フンシ シラビルン」（家相、地相を調べる）。「フンシ ミー ピイトウ」（家相、地相を占う人。風水師）

（宮城 2003・本文に併記された発音記号は内原が省略した）

石垣島の古語でフンシは「風水」をあらわした。すなわち、この地域には「風水」に関する何らかの知識、もしくは技術が伝播していたということになる。私は2004年から2012年にかけて、現地で複数のテーマにもとづく聞き取り調査を継続してきた。

その過程では実際に、家相・墓相といった方位学・地相学を重視する住民の証言も得られた。その他、この地域にみられる村落形成の規則性や、シーサー（獅子）の置物、石敢當（いしがんとう）といった「まじない」の類が、現在も老若男女問わず、幅広い層に認識されている様子がかがいがい知れた。いずれも「風水」にかかわる知識や技術であるが、ここでは、象徴的な3つの事例を紹介したい。

① 中学校の正門移設にかかる「噂話」 1998年、石垣市立石垣中学校の正門が移設された。この事業の動機について、当時は近隣住民や一部の保護者から「以前の門では気の流れが良くなかった」、との噂話が実しやかに囁かれた。

私（筆者）は1984年に石垣島で生まれ、1999年までこの島の市街地で暮らした。正門の移設が実施された年度は本中学校に通う生徒であり、大人たちの会話を通じて、この言説を直接耳にしていた。しかし、肝心の「気の流れ」とはなにか、具体的には何が問題で移設しなければならないのか、その辺りが曖昧なままであった。

時を経て2012年、私は本件の経緯について、あらためて学校側に問い合わせた。すると職員からは、「以前の正門は交差点に近かった。生徒の飛び出し行為を防ぐ観点から、門を移したと聞いている」との回答が得られた。この見解には無理がなく、外部に対しても整合性のとれた説明となっている。

その一方で、「交通の便を理由にするのは近代社会に対する建前だよ」、と語る住民（60代・男性）もいた。その男性は、移設以前の正門と御嶽の関係性を例にあげ、次のように解説した。

1998年以前、石垣中学校の正門は南東に向けて開かれていた。しかし当時は、その前面に真乙姥御嶽（マイツバオン）が鎮座していた。御嶽は当該社会の聖域であり、近隣住民でさえ、理由なく立ち入ることが禁じられている。南北の縦線で捉えた場合、南方にマイツバオンがあり、その後背（北方）に中学校の正門が位置する構図は不吉とされた。この一直線上の配置を懸念する人々が少なからずいたのであるが、そのような理由で行政を動かすことは容易ではない。そのため「交通上の問題」といった便宜がはかられ、「移設」に整合性をつけたのであろう……

「気の流れが良くない」と囁かれた原因も、こうした長年の「懸念」事項が影響したものと推察される。実際、本中学校に新設されたのは、約30m西方に並行移動しただけの正門であった。この新門は細い路地に食い込んだこともあり、利用者からは「以前よりも不便になった」との声も寄せられた。人間の動線にそぐわない形でなぜ移動させられたのか、その真意は、いまだ謎の部分が多い。

② **唐尺による吉凶判断** かつて八重山諸島の人々が台湾を旅行した際、土産として購入した品の一つに「唐尺」があった。唐尺とは目盛りに吉凶の刻まれた物差のことで、一般的な構造としては、一尺四寸四分を8等分に区分けし、さらにそれを4分割した、合計32目盛りのつくりとなっている。大枠にあたる8つの目盛りには、それぞれ財（吉）、病（凶）、離（凶）、義（吉）、官（吉）、劫（凶）、害（凶）、本（吉）の記号が付されており、仏壇や床の間、屋敷の門、墓の寸法などを決定する際に用いられる。

又吉真三の解説によれば、沖縄島の場合、その判断を下すのは主に大工や風水師の職分とされていた。ただし八重山諸島では、そうした専門の職人のみならず、自ら寸尺を選定する人々もいたという。減少傾向にあるものの、2010年代にもその選定行為（技術）は受け継がれており、特に「伝統的」な手法で建築に携わる大工は、唐尺を重宝する（又吉・「唐尺」『沖縄大百科事典』）。

③ **方位と干支による「位置」の把握** 第二次世界大戦を前後して、石垣島を包摂する八重山諸島にも日本軍が駐留した。この時、島内の住民を招集して軍事訓練が行われたのであるが、「右向け、右」の号令に戸惑う人々が続出したという。これを回想した古老の話によると、「右がどこか、左がどれか、普段は使用しないので困惑する住民が多かった」という。

現代も当該地域では、物事や他者、あるいは自己の位置を把握する際、指示語として「上・下・左・右」より、「東」「南」「西」「北」が多用される。「四方位」の尊重は、日常生活から祭祀儀礼に至るまで浸透しており、とりわけ祭祀の場面では、「干支」で方位・方角を選定することが主流となっている。あるいは「伝統的」な屋号、農事暦、星座や天候の変化を測る際は、干支の示す各方角が、それぞれ特定の意味を有すると考えられている。

ここまで簡潔に記した3項目は、いずれも、八重山諸島に伝わる「風水」の一端を示している。

①では聖域と近代的な公共機関の関係性を、②では唐尺の存在を、③では各方位（各方角）に何らかの意味が付与され、生活者に重視されてきた事実を記した。こうした事例の他にも、沖縄県下（とりわけ八重山諸島）では、「風水」にまつわる伝承やモニュメントを、随所で確認することができる。

本稿は、前半部で琉球全域に共通する傾向としての「島嶼型風水」に着目する。島嶼型風水は「大陸型」の風水と性質を異にするものとして位置づけられる。これは、現在の中華人民共和国を中心とする諸地域から伝播し、各地域の気候条件や生活様式といった実情に応じて、独自にカスタマイズ（再編）された技術や思想の総称をいう。その風水がいかなる様相を帯びていたのかを探ることが、第1の目的である。

また、後半部では八重山諸島（以下、八重山）の風水事情について論考を進める。詳細は後述するが、この

地域を取り上げる理由は、第一に、風水に関する古記録が他地域と比較して多く残されていることが挙げられる。第二は、複数の有人・無人島が密集するかたちで形成されているにも関わらず、各島の状況が不均質であり、歴史や文化も多様に展開されてきた点が挙げられる。これらの要因から、八重山に焦点を絞ることとした。また、今回は、1864年に編纂された『北木山風水記』についての考察も展開する。以上の手続きを通じて、近世の琉球弧、とりわけ八重山における風水がいかに変遷してきたか検討することが、本稿の第2の目的である。本題の前提として、まず先行研究から見ていこう。

1. 琉球・八重山諸島の「風水」に関する先行研究

学術から商業、現世利益を過度に追従する迷信まで、2012年（現在）、日本国内の「風水」に関連する書籍やメディアを通じての言及は、多岐に及んでいる。本題に際して、ここでは、日本国内の「風水」に関する先行研究ならび近年の動向を俯瞰する。

1990年、斎藤斉の「風水研究に関する主要文献目録和文・欧文編(刊年順)」が公表された。本文の目録には和文で105本(1903-1989年)、欧文で130本(1837-1989年)の主要文献(タイトル)が列挙されている。しかし、この目録に際して斎藤は、「諸分野において各々決して多いとはいいがたい」と指摘、さらに「風水の思想内容、原理ならびにその実用面にたいする理解が甚だ困難であることを示唆している」と総括した(斎藤1990)。

このままでは「理解が甚だ困難である」と感じていたのは、「風水」に携わる諸分野の研究者も同様であった。心許ない論文本数もさることながら、思想については思想史が担当し、歴史的経緯は東洋史、景観や都市構造の分析については地理学や建築学、民俗については民俗学や社会人類学、といった細分化も進行していた。当時の状況としては「風水の全体像を捉えることが難しくなり、どの分野も研究活動が停滞する傾向にあった」のである(斎藤之誉2009)。

「全国風水研究者協議会」は、そうした時代背景のもと、1989年に発足された。目崎茂和は本協議会について、次のように述懐する。

渡邊欣雄(東京都立大学)氏の奔走で、1989年に研究費の獲得とともに発足し、日本の『風水ブーム』の火付け役となった。この会の目的は、おもに沖縄の風水研究を深めること、中国、香港、韓国などの風水比較が中心であった(目崎1998)。

そして、各分野の研究成果を集積、共有し、風水の体系的な理解とその深化を測ることが、この協議会の意義であった。1980年代後半より東アジア各地で隆盛した「風水ブーム」(風水熱)との相乗効果もあり、90年代は、日本国内における「風水」研究が飛躍的に進む起点として位置づけられる(斎藤2009・宮内2009)。

全国風水研究者協議会には、沖縄側から都築晶子、高良倉吉、玉木順彦、中村誠司、新城敏男、町田宗博らが出席した(目崎1998)。各研究者の先行論文に関しては、本稿で適宜、紹介する。

いずれにせよ、この全国風水研究者協議会の発足にともない、日本国内でも「風水」についての本格的な研究と調査が深化した。近年の動向を見つめる限り、1980年代の後半から90年代中盤にかけての過程を、ひとつの転換期として捉えることができる。このとき、日本国内外の研究者がとくに着目したのが、琉球列島(以下、琉球弧)の「風水」であった。

本稿の冒頭ではその一端を記述したが、当該社会には現在もおお、その思想と技術が各地に伝わっている。琉球国がかつては独立した「国」であり、中華思想の影響を強く受けつつ、日本国とは異なる独自の社会体制、文化を形成してきたことも、その一因である。上記の背景を踏まえた上で、次項では、琉球弧における「風水」の特色をとりあげ、その概要を俯瞰してゆく。

2. 島嶼型風水の特徴

琉球弧における「風水」の語句には、様々な意味が包摂される。たとえばこの用語には、今日でいうところの「土木学」「地理学」「建築学」といった学術をはじめ、具体的な「技術」を指す場合がある。日本には「風土」という言葉があるが、琉球弧ではこの語句に近いニュアンスでも「風水」が用いられた。さらに屋敷や墳墓・便所といった「生活基盤そのものの立地」を指して風水（フンシ、フンシィ）と称することもある。

ここでは「島嶼型風水の特徴」と題して、以下、琉球弧における「風水」の受容とその展開についての考察を進める。当該地域の人々が、自分たちの暮らしを取り囲む「世界」をどのように認識してきたのか、まずはその点から確認したい。

「身土不二」の観念 琉球弧の島々には、生まれた子の胎盤（へその緒）を屋敷の裏庭に埋める風習があった。その行為には古来より、「土と人は切り離されるものではなく、相互依存しあうことで、不離一体を為す」という思想が潜んでいた。

こうした「身土不二」の観念は、古くはインドから中国、そして日本に至るまで、「東洋文化圏」の人々が共有してきたものであった。身体は住居（生者の屋敷・死者の墳墓）と結びつき、それらの建築物は土地とつながる。そして土地は宇宙、すなわち、空間と時間を司る領域まで延びてゆくという発想が、身土不二を支えている（渡邊 1994・191p.）。

この観念は、古代中国で発生した陰陽・五行説とも、密接なかかわりを持っていた。陰陽・五行説は、陰陽説と五行説の2学説から成り立っている。陰陽説では、宇宙のあらゆる物質が、負と正、暗と明、濁と清、重と軽といった相対的な関係を持ち、互いに強弱、消長を繰り返しつつ循環する体系が説かれた。一方の五行説では、その構成要素を五元素、すなわち木・火・土・金・水に求め、これらの働きが相互に、いかなる形で連関、作用しあうかが探求された（前城 1989）。

「風水」の第一義は、その陰陽・五行説をも包摂して培われた「技術」の総称とみることができる。現代ではこれを迷信、非科学的な占いの類として捉える向きもあるが、本来、風水は「地形、風や水の流れ、方位などから環境と人間の相関関係を精確に知ることによって、自然の動きに調和した人間（と死者）の生活を組み立てていこうとする、一種の環境認識科学、あるいは住空間設計思想」を指していた（渡邊 1994・184p.）。

「気」の概念の重視 風水において最も重視されたのは、「気」の概念であった。気はつねに流動し続ける「エネルギー」であり、これは、動植物の体内や生態系、さらに外界の鉱物（土地）を含む自然界において、凝聚・拡散を繰り返す物質と考えられた。

そうした観念を基底にすえる学問では、人間を取り囲む空間そのものが、一個の生命体として扱われる。とりわけ屋敷・墳墓・村落・城邑など、人々が生活を営む圏域は、気の凝聚する「場」がもっともふさわしい、との見識が育まれた。

しかし、「気」は人間の五感で捉えることの困難な存在でもある。そこで、これを把握し、活用するための「術」が要求された。都築晶子によると、「風水とは、狭義にはこの術をさし、広義には自然の環境・景観に対する象徴的解釈の体系」ということになる（都築 1989）。

主格が問われる現在の「環境アセスメント」 1990年代以降の日本国で、「風水」を「環境アセスメント」と換言したのは渡邊欣雄であった。では環境アセスメントとはなにか。現在、環境省が運営するホームページでは、この語句について次の解説がなされている。まず、その項目からみていこう。

環境アセスメントとは、開発事業の内容を決めるに当たって、それが環境にどのような影響を及ぼすかについて、あらかじめ事業者自らが調査、予測、評価を行い、その結果を公表して一般の方々、地方公共団体などから意見を聴き、それらを踏まえて環境の保全の観点からよりよい事業計画を作り上げていこうという制度です。

（HP：環境省総合環境政策局環境影響評価課・2012）

しかし渡邊は、「ここに見るように、主語は『人間の開発行為』であって環境ではない」と指摘する。さらに、

これでは「人為アセスメント」であり、「『環境アセスメント』が事実、環境からの影響評価を指す活動なら、風水判断こそまさに『環境アセスメント』そのものだったのではなからうか」と追及した(渡邊 2004)。

主格(主体性あるいは主語)をめぐる本件の問題提起は、思想や哲学・倫理学の分野においても、今後、ますます重要性を帯びてくると私自身は考える。

「風水」は、あくまでも人間を取り囲む「自然」を主体とする。それを人間の都合にあわせて歪めるのではなく、人間がその環境条件に適するよう、暮らしを調べていくという立場をとる。これは、「人類」を中心に物事を推し進めようとする取り組みと正対する観念でもある。

18世紀以降、西洋諸国から出発し、その後、東洋まで広く普及した「産業革命」の原理には、この「人類中心主義」が密接に関連していた。ただしその副作用として、この種の発想が生態系の破壊や、所々の問題をもたらしたことも、現在では明らかにされている。

こうした実情を受け、近年は「持続可能な社会」についての検討が本格化している。そのとき、「なにを主体とするか」という問いかけは重い、というのが渡邊の見解であった。風水の別名は「地理」(地理の法)である。つまり、「自然の法則に寄り添い生きること」こそ、この語句の真意にほかならなかった。

琉球における風水の受容 「風水」が琉球国に伝播したのは、1392年(察度43)の「唐栄」成立後であった。唐栄とは明国の洪武帝より下賜された人々(閩人三十六姓とも称される)の居住区で、具体的には、沖縄本島南部の久米村一帯を指した。この地区からは近世琉球国の中枢で重責を担った人物も多数輩出されている。久米村の人々は、長きにわたり、中国と琉球の「架け橋」(窓口)としても、重要な役割を果たしてきた。

古村落の形態から、1392年以前にも、「風水」が部分的に導入されたことがうかがい知れる。ただ、本格的にこれを「国策」として採用したのは、三司官の蔡温(1682 - 1762年)であった。蔡温も久米村の出身者である。彼は二度の渡唐経験をもち、その都度、現地で「風水」(地理の法)を学んだ。そして帰国後は、土地改良や土木政策の分野で積極的にこの技術を応用した。

蔡温の取り組み以後、「風水」はますます重視されてゆくこととなる。たとえば首里城の立地選定や、各村落の移動にともなう方向性や土地の決定に際しても、王府に所属する風水師(地理師・フンシーミー)が派遣され、検討したのち判断が下された。

そうした専門性の高い案件は例外として、日常的な場面においても、比較的習得の容易な「術」が民間に普及した。なかでも、屋敷や墓所の選定においては、風水が盛んに活用された(目崎「風水」『沖縄大百科事典』)。

村落風水の特色 「風水師」について上記で触れたが、とりわけ、1737年以後に新設された村落の大多数では、この技術者の指導を受けた形跡が認められる(仲松 1975・他)。高原三郎は、その規則性(形跡)を有する村落を指して「南島式村落」と命名した。主に、以下の条件を満たすのが「南島式村落」である。

1. 道路網の秩序性、碁盤目型、格子状、直交式の道路網をもち、道路間の間隔・距離あるいは幅などは一定の傾向がある。
2. 屋敷地の秩序性、個々の屋敷地は、その形態(矩形または正方形)、その広さ(80坪~200坪)、その配列の仕方などに著しい均一性がある。
3. 密集度の非常に高い集村であること。

ただし仲松弥秀は、この型式に当てはまる居住区を「地割制集落」と名付けている。地割制は近世琉球国で採用された土地管理制度で、この手法が実施されたのが1737年であった。

1736年以前は玉城村(沖縄島)の前川村落のみ、碁盤目型の構造を有していた。その一方で、地割制の開始年以降に移動した集落(自主的・強制的に移動した新創村、あるいは再建された村落)では、そのほとんどに「地割制集落」の性質が認められる。仲松の調査によると、沖縄県全域では、約180余の村落がこれに該当した。

「南島式村落」「地割制集落」、双方の名称はいずれも同様の形態を示している。ただし、前者は「日本側」の視点から解釈した向きが感じられる。転じて、後者では、「内側の論理」、すなわち、琉球側の実情に即した色が強調されている(田里友哲「地割制集落」『沖縄大百科事典』)。本稿では「内側の論理」を重視したいと

考えるので、ここからは便宜上、「地割制集落」の名称を用いて論考を進めていくこととする。

クサティ（腰当）と抱護の情（ほうごのころ） 各地の「地割制集落」を形成する上で欠かせなかったのが、「クサティ（腰当）」と「抱護の情」という2つの概念であった。クサティ（腰当）とは、「信賴し、寄り添い身をまかす」という意味の言葉である。村落形態の「理想」としてこの語句を捉えた場合、幼児が、親の膝に座っている状態が想起される（仲松 1975）。

仲松弥秀の解説によると、「家や村は寒い北風を防ぐ丘や山をクサティにして南面する立地が良いとされ、その丘や山を<クサティ森>と」称した。さらに神観念（または信仰）においても、祖霊神をクサティとする思想により、村落基盤の安定がはかられた（仲松「クサティ」『沖縄大百科事典』）。

「抱護の情」は、中国では裨（ピ）、韓国では裨補（ピボ）がこの言葉に相当する。陳碧霞と仲間勇栄による共同研究では、これらの語句に関して次の言及がなされた。

①

中国の主な地域では、地形上の観察が強調され、風水的観点から改善法則（中略）を適用する。（中略）、韓国語の“裨補”は、欠陥のある風水景観を補助する手段という意味であり、森林は不完全な風水地形を生命力に満ちた地形に保管するために用いられてきた。

②

抱護を直訳すると、文字通り「抱いて護る」という意味になる。理想的な風水地形では、周囲の丘が生氣を抱えていることが求められる。ところが、琉球列島はいくつかの低い丘があるだけで、ほとんどが平地である。また自然環境が厳しく、夏に頻繁に襲来する台風と冬の強風に悩まされている。沖縄では、抱護は、家と集落の周りに木を植えることで不完全な風水地形を理想的な居住環境へと整えることを意味する。

（陳・仲間 2009）

①はいわば大陸型風水の特色を示唆している。一方、②では、島嶼型風水独自の工夫が指摘された。抱護は「特定の場所を風水害から保護する施設（森林・地形）をさす歴史的な用語」であり、「立地条件の相違によって浜抱護（暴風・防潮林）、村抱護、田畑抱護」と微妙な差異にもとづいて区別された。いずれにせよ、これらは今日でいうところの、保安林や風水害防備林といった仕組みにも、共通する機能を有していた（仲間「抱護」『沖縄大百科事典』）。

多良間島の抱護（抱護林） しかしこうした「風水」技術も、コンクリート製家屋の普及とともに、徐々に忘れられつつあるというのが現状といえる。近代的な科学技術をもつことにより、「地理」の意味合いや、自然に対する人びとの認識も変容した。

ただ、その消失過程において、多良間島は現在もお、村落風水の面影を色濃く残している。この地区で実地調査を行った仲間と陳も、植生学の観点から、「村抱護」の保存状態の良さを特筆した。

多良間島は北緯 24 度 39 分、西経 124 度 42 分、宮古島の西約 67km、石垣島の北約 35km に位置している。現在の多良間村は、この多良間島と北西約 12km に位置する水納島を含む行政区となっている。

現存する「林抱護の林帯は 1742 年に植えられた」といわれており、研究者は、島内を 5 つのプロットに区別して調査を行なった。

その結果として、村抱護ではリュウキュウマツ・フクギなどが植えられ、海岸の浜抱護はアダン・オオハマボウ・クロヨナなどが植生されること、屋敷抱護には家屋を取り囲むように、主にフクギが植えられたことが判明した。とくにフクギは成長に時間を要する分、台風などの外圧にも耐性のある植物として知られている。また、建築材としても有用で、夏は涼しく冬は保温効果がある材質として重宝される。

その他にも、本論文では、「琉球型の風水集落景観は、屋敷抱護、村抱護、浜抱護から成る異なった要素を持つ三つの円で形成されている」、といった特徴が示された。

③

地勢を強調する中国本土の風水とは対照的に、琉球の風水集落は屋敷、集落の周辺を樹木で囲う（中略）、中国と韓国では、風水集落景観は周囲の地勢を蔵風得水（風を貯え、水を得る）の観点から注目する。対照的に、沖縄では、集落の家々は多層の林帯で囲む（中略）、集落を冬の北風と夏の台風から守るためである。

（陳・仲間 2009）

地形ではなく植林によって村を「抱護する」のが島嶼型風水に見出される特徴である。大陸にとっての「理想」が島嶼社会の「理想」と一致するとはかぎらない。陳と仲間はその事実を、多良間島の实地調査から導き出した。

ここまでは琉球弧全域に共通する風水の特色について記してきた。次項からは、八重山に視点を移して論考を進める。当該地域に着目する理由は、冒頭で示した通りである。

3. 八重山諸島における「風水」の展開

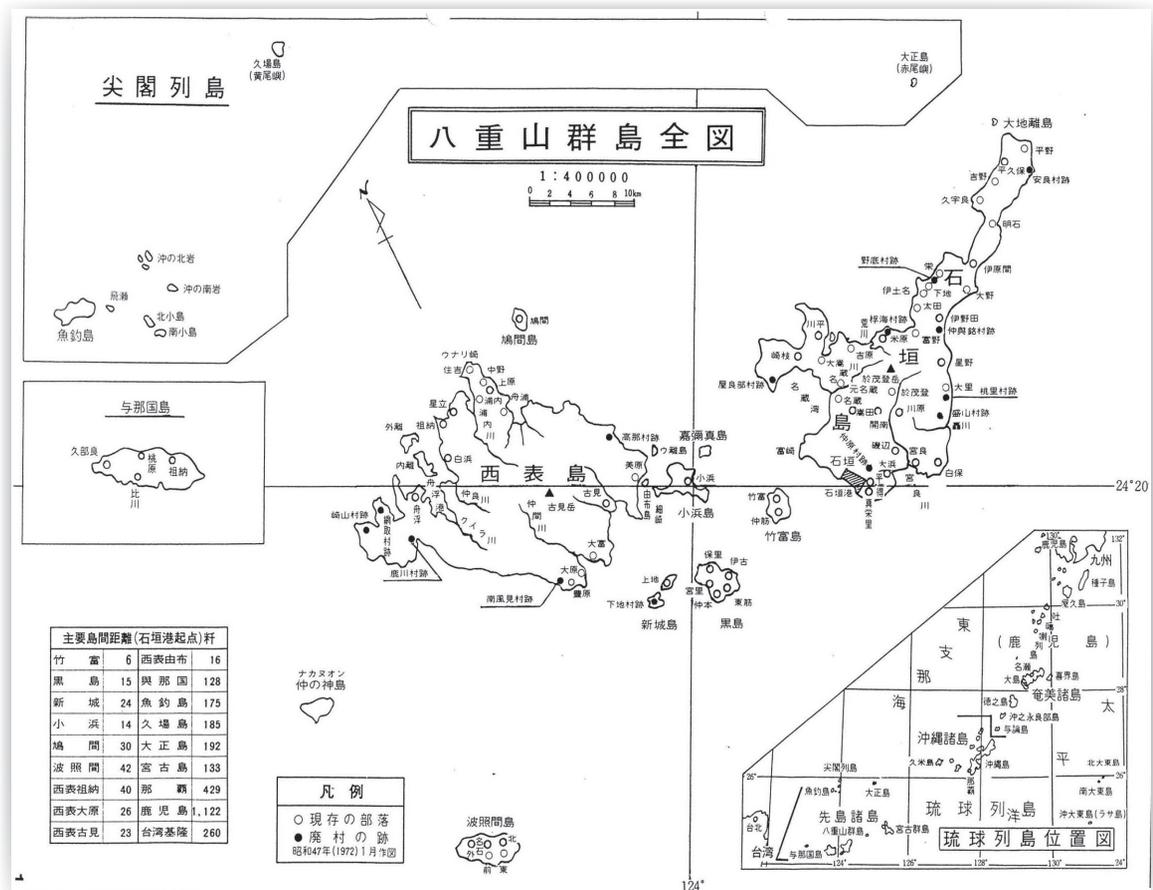


図1 「八重山群島全図」(牧野 1981)

地理的な位置 八重山諸島は北緯 24 度 02 分～ 25 度 55 分、東経 122 度 55 分～ 124 度 33 分、太平洋と東シナ海をのぞむ位置に面している。

現在、各種交通の中継地点として機能している石垣島は東京から約 2000km、沖縄本島から約 450km、台湾（基隆）からは約 270km の地点にある。気候は「亜熱帯」に属しており高温多湿である。

したがって、稲は旧暦の10月に種子を播き、1月に植え付け、5月に初穂を刈取、6月にすべての収穫を行なうので、日本の収穫祭にあたる秋祭り（豊年祭）は新暦の7月前後、すなわち夏に行われる。ただし、古記録には次のようなくだりも見られる。

両先島・久米島御用布織女共至極困窮者共ニ而、極寒比ニ茂致薄着及難儀候段 被聞召上、何分取救候様御意被下……

（『石垣市史叢書 18 万書付集（下巻）』203）

其島御用布織女共多分困窮之者ニ而、極寒之比ニ茂致薄着至極及難儀候段被 聞召上、何分取救候様 御意被成下候……

（石垣市史叢書 18 『万書付集（下巻）』204）

八重山諸島と宮古諸島を総称して「先島」（先島諸島）という。上記の引用は、近世の琉球王府が、当時、この地域の冬季を「極寒」と表記していたことを示す史料であった。この箇所について、近世八重山史の得能壽美は、「木綿畑確保の願いをいっている文書であることを差し引く必要があるかもしれないが」、八重山の冬は「亜熱帯」ではありながら、「やはり寒いものであった」と記している（得能 2009）。

- ・石垣島 ……年平均降水量 2,061mm / 気温摂氏 24.0℃ / 湿度 77%
- ・西表島 ……降水量 2,342mm / 気温摂氏 23.4 度 / 湿度 81%
- ・与那国島 ……降水量 2,364mm / 気温摂氏 23.6 度 / 湿度 78%

石西礁湖 もう一点、八重山諸島を捉えるうえで欠かせないことがある。それは、この島々の社会が、歴史的にも文化的にも、「陸」と「海」を媒体して形成されてきた、という事実である。近年では「島と海を総体とする文化圏」という概念が提起され、当該地域を把握する新視点として、各分野でも導入されはじめている。

かつて「国境」を知らなかった人々は、自由に海を往来していたのであろう。まして、眼前に島嶼がひろがる人びとにとって、海はその島々をつなぐ道であり、食材や家財道具など、様々な物資を調達する「場」にほかならなかった。

①

八重山の地域特性とは、それならどのようなものなのでしょうか。指呼の間に位置する八重山の島々を見ると、一つの島嶼文化圏として次のようなことが指摘できそうです。

九つの島々、小さく肩を寄せ合うようにまとまった島嶼群として構成されている八重山群島は、島々と海を総体とする文化圏、つまり島々は歴史的にも文化的にも相互にかかわり合うとともに、海も有機的な存在として考えられるということです。（崎山 2000）

②

島嶼という自然条件は他との簡単な同一化を許さずに、島々の個性を形作っているのだが、それらの島々は閉鎖的でも孤立的でもなく、開放された社会であった。

かつて琉球王国は外に開かれて海外交易で栄えたといいながら、琉球王国内の島々を対象とする研究者は、なぜか島社会が閉鎖的生活を営んでいたと思いこんできた。個別的な民俗調査や言語調査の成果により、歴史の研究者も、島を一つの世界・宇宙とみて、他と断絶したものを勝手に理解してしまっていたのである。

それらはひじょうに重要な成果をもたらし、研究を進展させているが、琉球・沖縄全体を見渡すときに

は、それぞれが事例研究であるという視点に、研究者自身がまだいたっていない。また、歴史研究においては、東アジア・東南アジアのなかの琉球という視点からの研究が先行し、琉球はあたかも一枚岩のごとき印象を与えてきた。簡単に言えば、地域史研究と琉球史研究の関係が開かれていないのである。これは八重山という地域においても同様であり、「島・村では」と「八重山では」の関係が開かれているとはいえない。

(得能 2007)

①は崎山直の見解を、②は得能壽美の論文の一節を抜粋したものである。両氏は八重山に軸足をおいて研究活動を続けてきた。そうした研究者の視点から捉えた場合、「シマ社会」は開かれて見えたのである。

これまで多くの観察者からは、当該地域の暮らしは、海に隔たれた、内向的なものとみなされる傾向があった。実際、台風や時化など、悪天候の折りは海も兇暴な表情をみせる。しかし、それだけではなかった。

「自然」から享受する恩恵と、被る厄災の性質をみてゆくと、双方が、「シマ=アイランド」を単位として共有されているとは限らないことも、見えてくる。むしろこの地域では、海に面する「方位」や、陸地の「高低」などの諸条件により、人々の生活様式や、あるいはそれに基づく価値観の方向性も多岐におよんだ。山を挟んだ「島」の西側と東側では、あるいはハブのいる島とない島では、おのずと生活文化が違ってくる。そうした特色を有する「文化圏」の人々が、重層的に重なり、ネット・ワークを構築してきた。八重山諸島は、各島の配置が円環を描くように形成されていることから、「石西礁湖」とも称される。「石西」は石垣島と西表島の頭文字からきている。本稿で扱う「風水」も、そうした生活圏に寄り添うかたちで育まれてきた。

タングンとヌングン

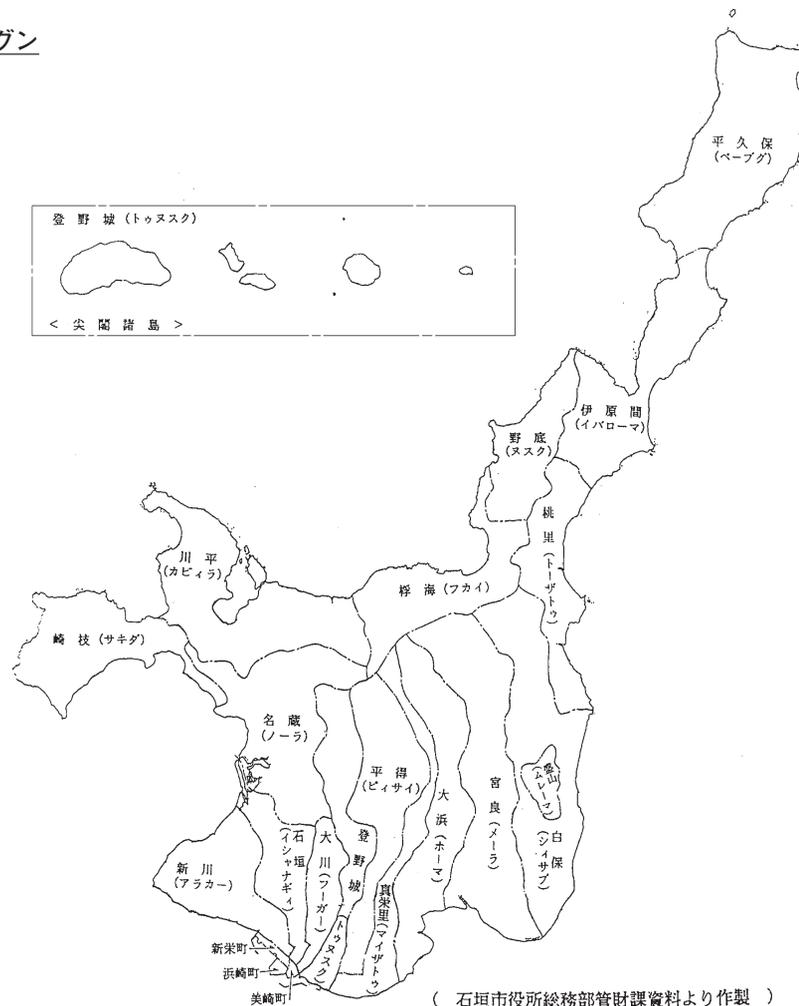


図2 大字区界図 (石垣市史編集室 1989)

石垣
(イシャナギイ、
イシャナギイラ)

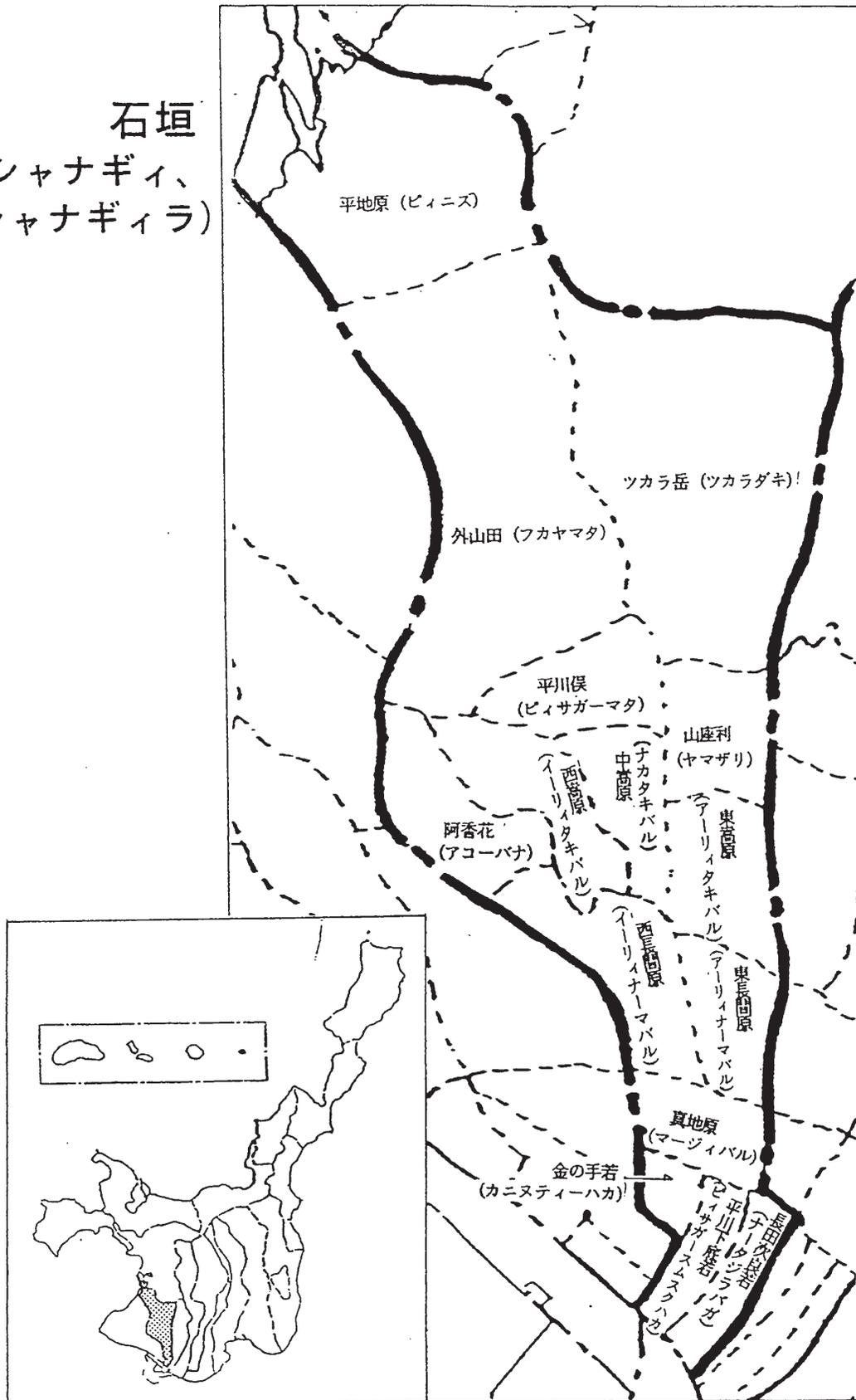


図3 旧石垣村の区割り (石垣市史編集室 1989)

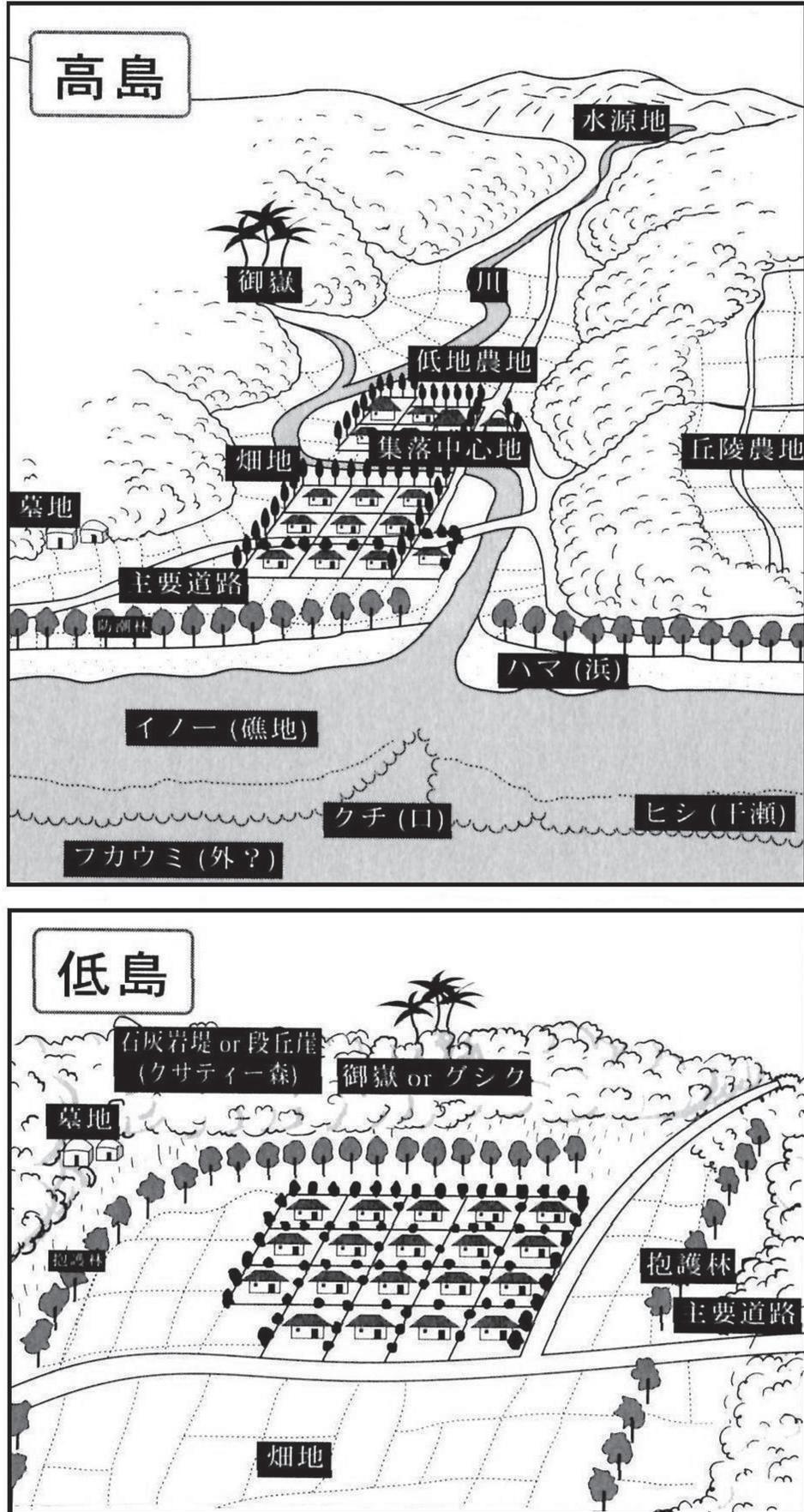


図4 沖縄における高島低島の風水の村落モデル (目崎 1998)

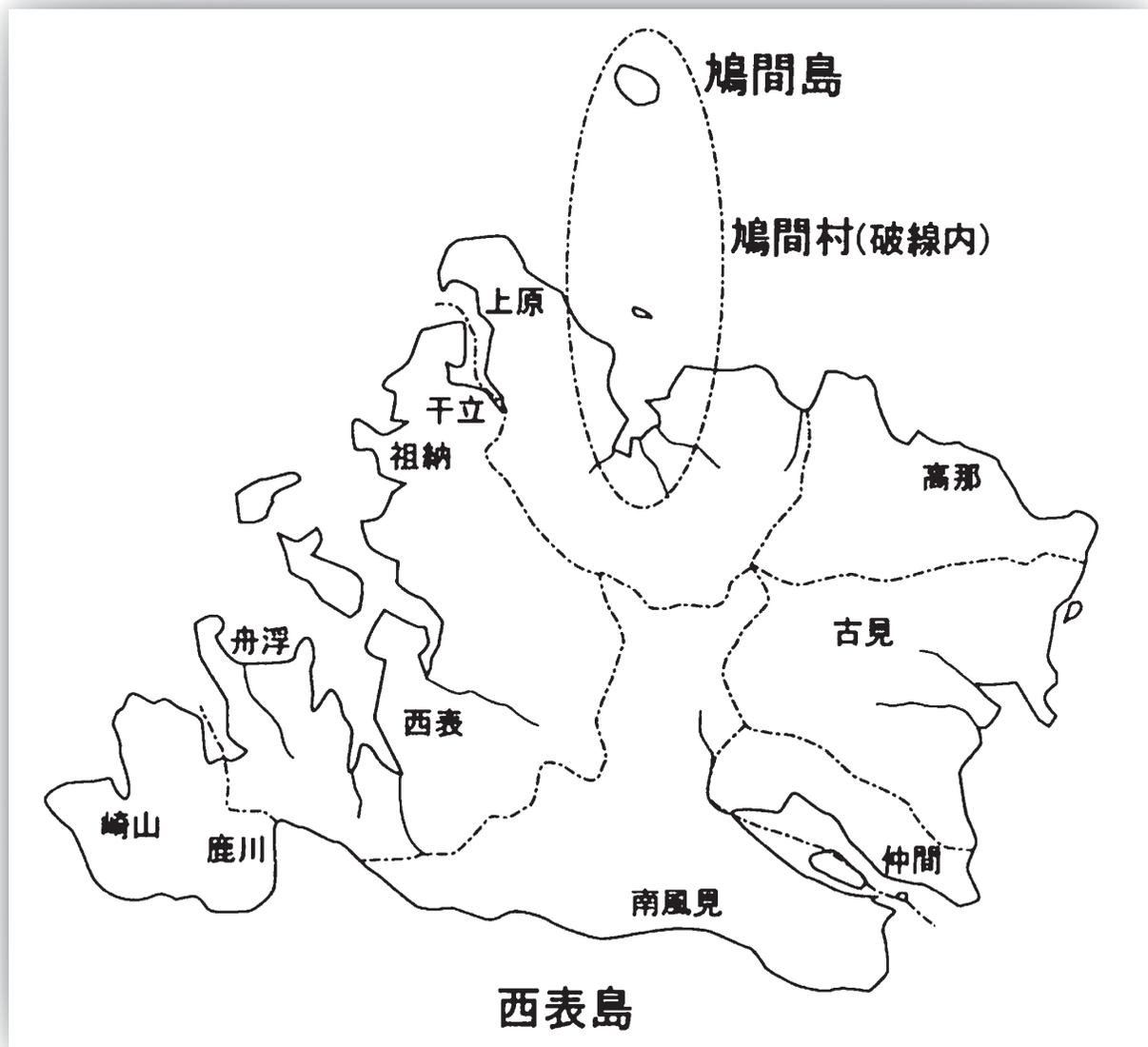


図5 鳩間島の通耕地図（18—20世紀）（得能 2007）

〔図2〕は、村落（大字）の区界線が引かれた石垣島の地図である。細く縦長に、南北あるいは東西に区分された様子が確認される。この枠組が各村落を形成していた。〔図2〕の区界が明確に定められたのも、やはり、1737年以降のことであるとされる。

〔図3〕は、そこから一例として、旧石垣村の内容を示したものである。図中の上部から海面にかけて、「山」（水源や獲物、材木、薪、木の実など）→「畑作地」（あるいは水田）→「人々の居住区」→「海」の順に、地名が連なっている。石垣島は他島に比して標高の高い山（丘）がある。ゆえに、このような「間切り」が実行された。それぞれの村で生きてゆくために最低限必要な要素が、この「枠」に収まるよう、設定されていたのである。

つづいて、〔図4〕では、石垣島のような「高島」と、「低島」を対比させた類型図が示される。この「型」を基本構造として各島の村落風水が形成された。ちなみに、八重山の古語には、「タンゲン」「ヌンゲン」の語句が残されている。

タンゲンは「田国」と表記され、「高島」とほぼ同義の文脈で用いられる。八重山では石垣島、西表島、小浜島などがこのタンゲンに分類される。山地をもつ島、水が比較的豊富で、稲作主体の土地利用が可能な島というイメージが、タンゲンには付与された。

一方、ヌンゲンは「野国」のことをいう。こちらは「低島」とほぼ同義であり、八重山では竹富島、黒島な

どがこの類型に連なる。これらの島々は他島に比して高地が少なく、琉球石灰岩からなる平坦な地形となっている。したがって、水土に恵まれないなどのハンディキャップも抱える。ただし、タンゲンとヌンゲンと比較した場合、人口が密集し生産活動が盛んになるのは、史実をみる限り、むしろヌンゲンの方であった。

八重山には「風気」と呼ばれる風土病が古来より存在していた。風気は山間部の水辺や密林地帯に踏み込んだ際に罹患することの多い病であり、それが、人間によるタンゲンの「開発」を妨げる一因にもなってきたとされている。風気の正体は「マラリア」であり、第二次世界大戦後、アメリカ軍の衛生政策にもとづいて、撲滅運動が展開されている。

話を戻そう。[図4]では低島の性質が提示されたが、鳩間島も、ヌンゲン型に分類される島であるが、鳩間島の場合、その村区分はやや特殊な形となっている。それを示したのが[図5]である。破線で囲った範囲が「鳩間村」として扱われた。その枠内には、西表島の一部も収められている。ということなのか。

すなわち、「鳩間島」には「山」の要素が不足しており、それを補ったのが西表島であった。鳩間村の人びとは舟を利用して西表に渡り、そこで耕作したり、必要な物資の調達を行っていたのである。八重山ではこれを「通耕」と呼ぶ。こうした行為—行動の形態も、従来の「シマ宇宙」的発想（島は閉ざされた空間であるという先入観）を、覆す証左として挙げられる。人や物はずねに動き続けた。そして、決して一様ではない人々が、それぞれの違いを認識しつつも、複雑に絡み合い、互いの文化を支え合ってきた。

八重山に残る風水史料 さて、ここまでの事項を踏まえた上で、以下は「近世琉球」時代（1609年から1870年代後半）を中心に、八重山諸島における風水がどのように受容され、展開したかをみてゆく。次頁に示すのは、都築晶子（1990）と新城敏男（1993）の研究を基に、内原が作成した簡易年表である。年表の各項目には、適宜、古記録に見られる条文の内容（現代語訳版）も挿入した。

—八重山「村落風水」の関連年表—

- 1629年 楊明州（1602年生、浙江省台州府の人）八重山川平村に漂着（1648年まで逗留）、川平村の風水を見分、3か所に自然石を建てる。（「八重山の村落風水」新城敏男）
- 1667年 周国俊、福州で地理を学ぶ（『球陽卷6』）
- 1684年 「ハンナ大主墓碑」の碑文なる。7代石垣親雲上宗延、墓を造営。5代石垣親雲上が大夫官古波蔵親雲上（楊明州）に墓地の風水をみてもらい、それ以来、風水景観の護持に努めてきたという（金石文137）
- 同年 風水見の外間親雲上が、八重山に渡海され、蔵元をはじめ、石垣・登野城そのほかの村構えを見分されたと見えている。（石垣市史叢書13『八重山島年来記』436）
- 1686年 久米村の外間親雲上（同上の風水見）に、宮古島の風水を見てもらうように申請したので、そのついでに八重山へも渡海して風水を見分するように仰せ付けていただきたく、上国中の頭、大川村の石垣親雲上が願い出たところ許可され、八重山に、ともに下島した。八重山の所々の風水を見分し、翌年宮古島の佐事船で渡海された。
名蔵村、崎枝村、川平村は風水が悪いので、名蔵村は本名蔵から潮嶺へ、崎枝村はかなまから東石兼久へ、川平は多田、仲間、仲栄、大口から古場川、大津原へ村の敷地を移すようにと外間親雲上が見立てられたので、この年から次第に引越した。（石垣市史叢書13『八重山島年来記』444・445）
- 1702年 平久保村は喜屋名にあったが、風水が悪いので、堀川野へ外間親雲上が見立てたとおりに移った。5家族いる。（石垣市史叢書13『八重山島年来記』488・489）
- 1708年 蔡温、福州で地理を学ぶ（～10年まで）。（『球陽卷九』『蔡氏家譜抄（具志頭家）』）
- 1738年 口上覚
恐れながら申し上げます。八重山は昔から風水の善し悪しの見分がありません。そのことを申し上げて、康熙23年（1684）に風水見の外間親雲上が渡海され、蔵元を始め石垣・登野城その外の村構など見分いたしました。そうしたところ、それ以来、諸村は繁栄しているので、諸村構の順逆がどのようになっているのか、大御支配以前に今一度、風水の見分をしていただきたく思いますので、何も差支えがなければ、そのように仰せ付けられたくお願いします。この旨、よろしくお取り成し下さいますよう、御頼み申し上げます。以上
午5月15日 八重山の頭三人
却下される。（『参遣状』（喜舎場家文書）・石垣市史叢書9『参遣状抜書（下巻）乾隆2年（1737）～乾隆30年（1765）』1995年・104）
- 1771年 乾隆36年・先島諸島を大規模な地震・津波が襲い、現地は甚大な被害を受ける。
- 1786年 「琉球科律」公布。御風水所に踏入ること、御風水所から樹木・土石を盗むことを禁止。（『琉球科律卷七・卷八』）
- 1858年 仮屋や寺敷・番所、その他抱護浜・抱護屋敷の囲み樹木の育成については、以前から申し付けているが、次第に手が届かずやせ衰えたところもある。今のままでは、風水に差し障るのはもちろん、風雨の時は、人家も田畑も損害を蒙り、島中の衰微の基になるが、どうであろうか。以後必ず、時期を見計らい、松その他適当な樹木を植付させ、抱護の目的が確実に果たせるよう取り計らうこと。（石垣市史叢書7『翁長親方八重山島規模帳』1994年・227）
- 同年 諸村の敷地替えは、願い出て許可を得た上で行うことで、簡単なことではないにも関わらず、所管の役人の中には思いつき次第に行うものもあるという。風水が悪いとあって、間も置かず敷地換えを行い、結果村の疲弊のもとになり、とりわけ問題である。確実に村の敷地替えをしなくてはならない理由がある場合は、耕作地の用水の便を考え、その村の百姓と所管の役人で願い出て、在番・頭が添え書きをし、指図を受けて行うこと。
（石垣市史叢書7『翁長親方八重山島規模帳』1994年・328）
- 1863年 八重山の風水見分（風水見久米村与儀通事親雲上鄭良佐、66年まで滞在）。

(『御使者在番記』)

1864年 鄭良佐、『北木山風水記』を提出する。

1875年 潮垣は、本田畑の保護だけではなく、場合によっては、風水にもかかわり、大切なことなので、仕立てるのに念を入れなければならないが、開墾したり、または、伐ってしまいなくなっている所もある。風水の差し障りになるのは勿論、わずかの風波でも作物に損害が生じ、百姓の痛みも軽くないので、アダンやその他ふさわしい樹木を植え付させ、在番・頭・農務担当者が巡察の際に気を付け、十分に生い茂るようにとりはからうべきこと。

(石垣市史叢書 14『富川親方八重山島規模帳』2004年・122)

1895年(明治28) 八重山忠順姓黒嶋良慶、羅経を制作(羅経の背面)

同 年 同上、良慶が「風水書」の写本を作成

1918年(大正7) 八重山の「象吉大通書」の写本になる(八重山・兼本家蔵)

- 1、新城敏男「八重山の村落風水」『史料編集室紀要第18号』沖縄県立図書館史料編集室 1993年 所収
- 2、都築晶子・玉木順彦「沖縄風水関連年表」窪徳忠編『沖縄の風水』1990年・平河出版 所収 参照

『北木山風水記』について 年表中、1863年の項目に、「八重山の風水見分」の一文が見える。この時、首里王府から風水見久米村与儀通事親雲上鄭良佐が八重山に派遣され、風水による各シマの「環境評価」を実行した。鄭良佐は17人の地方役人(現地の役人)を引き連れ、各村を巡見し、翌年の1864年、その結果を『北木山風水記』として提出した。この近世八重山の村落風水を記録した『北木山風水記』は、現在、石垣市史編集課から『叢書16』として翻刻版が発行されている。本文の「序」には、この巡見の動機が見られる。ここでは、新城敏男の「解題」に記された要約を引用する。

1771年の大津波で村は破壊され、その後の村の再構成時に風水鑑定がなされなかったこと、新村の創設時にも風水鑑定がなされなかったことに各村の疲弊の原因があるのではないかと協議し、風水師の派遣を申請した。(その結果、派遣された)鄭良佐は、島中の風水を鑑定し、その吉凶を解説し、道路の順逆や抱護の欠落を絵図にして、八重山の役人に提出した。

(新城「解題」より、一部改)

右の引用には「風水師」、「風水」という言葉が登場する。この風水師とは「地図とコンパスと測量計をもって山野をめぐり、人びとに土地の良否を教示していた」人物のことであり、またここで用いられる風水(思想・技術)とは、「地理学の源流でもあるが、地形学、環境学のひとつの礎石」としても位置づけられるものであった(目崎1989)。

『北木山風水記』に関する先行研究は、齊木崇人・浦山隆一・渋谷鎮明・那根律子(1997)、齋藤之誉(2009)、坂本磐雄・江田知史(1995)、新城敏男(1993・2002・2005・他)、陳碧霞・仲間勇榮(2009)、椿勝義・坂本磐雄・北野隆(1997・2003)、都築晶子(1990・2005・他)、目崎茂和(1998・他)、渡邊欣雄(2001・他)など、1990年代から2000年代にかけて加速的にその厚みを増している(研究者氏名は50音順)。

こうした先行論文と本研究をいかに結びつけてゆくかは次回以降の課題としたい。その代わりに本稿では、『北木山風水記』から四カ村(登野城・石垣・大川・新川)の共通項目を抜粋、内容を一部改め、現代語訳にもとづくダイジェストとして、記載することとした。次項から、箇条書きにまとめた各項の要点を記述してゆく。

仕事始め……冬至の後の六辰、六寅の日。

立てる日……大晦日の夜、生肉三片を供えて祭り、正月元日の寅の刻（午前4時）。

他人に見られてはいけない。そうすれば、霊妙な働きをする。

11. 悪石……門前にあれば「凶険の災い」がある。
家屋の後ろにあれば、「廢絶」の障りがある。
砕いて除去すれば、もっとも吉である。
家屋と石の間に樹木を植えて垣を築き、それによって遮っても良い。
12. 人家の出入り口の前……芭蕉を植えてはいけない。「鬼を引き、婦人多く病を得る」と言われる。しかし、出入り口の前だけ避ければ、あとはどこに植えても良い。それにも関わらず、「俗巫」の言葉にまどわされ、広い余地に芭蕉を植えなければ、夏の衣服はいったい何によって作るのだろうか。戒めよ。
13. 人家の青々とした竹木……財産もだんだん増える。しかし、多く植えて繁茂すれば、天光を遮蔽し、陽気がなくなり、陰気が多くなる。
家人の活気が消え、生気が失われ、衰え、元気がなくなる。ひどい場合には、化け物や妖怪などが棲み止まり、人を害する。
また、日光を遮断するため、太陽の陽ざしが届かず、湿気が多くなり、人を病気にするので、全くよくないことである。
本村の各家の内、茂って高くなっている竹木は、その半分を伐採しなくては、その障がある。
14. 宅地……前が広く、後ろが狭い者は、貧乏する。
前が狭く、後ろが広い者は、富貴となる。
右が長く、左が短い者は、富み、右が短く、左が長い者は、子孫が少ない。左の角が欠ける者は、長男の利にならない。
右の角が欠ける者は、次男の利にならない。
本村の各家、この障りを犯している。改めれば、障りはない。
15. 水……「財の気」である。
門……「気の口」である。
もし、門から水を出せば、「破財の障り」がある。吉ではない。
戊（西北西）
辛（西北西）
酉（西）
未（南南西）
申（南南西）
丙（南南東）
丁（南南西）……これらは十二宮方位の道理に極めて合致する。
それぞれの便宜によって流出すべきである。
16. 前宅後墳（前が家、後が墓）……墓は興隆し、家は零落する。
前墳後家（前が墓、後が家）……家は繁栄し、墓は衰微する。
間に道を開き、その凶を避けるべきである。そうすれば吉である。

17. 家が大きく門が小さい……「気」は閉ざされる。
家が小さく門が大きい……「気」はもれる。
それぞれの家の大小によって、門を開くべきである。
そうすれば吉となる。
18. 門前の青草……「愁い」や「怨み」が多く吉ではない。
19. 門前の糞屋……もし糞屋を見れば、財が散って、人も離れていく。
この障を犯してはならない。
20. 家の前後の肥溜め……「悪臭」と「穢れ」が充満していれば、吉ではない。
21. 道を挟んで相對している二軒の家……必ずどちらか一方の家が「衰微」する。
この障を犯してはならない。
22. 竈……命を司る神であり、一家の「吉凶」「禍祿」に關係するものである。両者の關係は打てば響くような關係である。
「祿」は命を養う源であり、竈は「祿」を食する所であるため。
「万病」はみな飲食によって生じるので、竈は必ず吉方を選んで置く事。
本村の竈は、
戌（西北西）
乾（北西）
亥（北北西）にある。
八宅では「天医」、九宮では「生氣」で、もっとも吉である。
23. 竈……後ろに井戸があれば、妻が夫に勝つという障りがある。
この戒めを犯してはならない。
24. 井戸……門前に向き合っていると、男女みだりになり、心は別人のようになる。
垣で遮れば障りない。今後はこの障を犯してはならない。
25. 井戸と竈……相對すると男女は淫らになる。今後、この障りを犯してはならない。
26. 屋の梁……竈を威圧するような位置にあれば多病となる。
27. 竈……竈の前や左右に門があつて突き当たっていれば、言い争いの元となり、
「破財（財産をつぶす）」ことになる。
28. 竈……竈の後ろに、火門に対して門や窓を開いてはいけない。
家中の不安の元となる。
29. 竈……まだ門にはいらないうちに、竈が見えると、「破財（財産をつぶす）」ことになる。門をくぐり初めに竈が見えるのも、同様である。
30. 村の井戸……兌（西）、乾（北西）「延年」・「天医」の方位にある。吉である。

31. 天井（中庭カ）……家のかなめであり、「財禄」のかかわる所である。
必ず正方形でなければならない。
日の字に似ていれば、吉でない。穢れを置くのも、吉でない。
32. 厠……子（北）
壬（北北西）
癸（北北東）
八宅では「五鬼」、九宮では「殺気」。厠はこの方位はもっとも吉である。
しかし、子の方位に厠を作ってはいけない。子の方位は巽、卦の飛ぶところ、巽は文昌の星である
ので、この地に厠が有れば、人民の多くは聡明にならない。
33. 厠……丙（南南東）
午（南）
丁（南南西）
八宅では「禍害」、九宮では「殺気」。厠がこの方向にあるのは好ましい。
34. 番所・各家……艮（北東）を背にして坤（南西）に向く…艮宅である。大門…開いて坤（南西）にあり。
八宅の方位…艮宅の生氣は坤（南西）にあり…もっとも吉である。
35. 九宮の方位に照らしてみると、艮宅（ごんたく）の場合、坤掛（こんか）は艮宮（ごんきゅう）に飛び、
飛宮の坤土は、坐宮の艮土を助け旺気の方となる。五黄は艮宮に飛び、五黄の「殺」を犯すことになるが、
五黄は土に属し、本宅の旺気となる。門路は却って吉である。

☆ 石垣村別項目（石垣村のみ記された項目）

- 5 - 8. 四方路（四方に道があって屋敷を囲まれている家）。世に、癡癡の人を出す。
便宜を見計らって、道の一方を塞ぎ断つべき。そうすれば吉。

☆ 大川村別項目（大川村のみ記された項目）

- 6 - 1. 前面の街巷（道）……
・広げるべきである。そうすれば、「人」と「財物」の両面に効果があらわれる。しかし道が狭ければ
「陰気」になり、「人」と「財物」ともに、衰えるであろう。
・前方の窪んだところから吹いてくる風があれば、貧しくて苦しみ、「敗絶」の障がある。
・本村の前の道路はとても狭く、また、窪んだ所がある。これを放置するのは吉ではない。道路を拡張し、
また、左右に少々の樹木を植え、風を遮る。そうすれば吉に転ずる。
- 6 - 5. 四カ村は、山の形を以て言えば（四村で）一体である。水の勢いもそうである。
もし水が流れるところに土を置いて塞げば、「山気」は貫かず、「風水の道理」に合わない。
また、「白圭」の道は「禹」の道とは違う。よく考えなければならない。
- 6 - 9. 四方路（石垣村に同じ）。

☆ 登野城村別項目（登野城村のみ記された項目）

7-7. 道路……折れ曲がっていて、めぐるようにして来れば、「気」を導く。

横に向かって進み、身を抱くようであれば、「気」を仕切ることになる。

登野城村では、後方高く、前方低くなっている。

村中の「気」は、走りもれているであろう。吉ではない。

美崎の前から横に道を開いて、廻り抱えるようにすべきである。

そうすれば、村の「気」は走りもれることはなく、吉である。

7-8. 水が往来する土地……水が流れれば「繁栄」し、塞げば「衰微」する。

水の道にはもともと、自然の「気運」がある。

登野城村は、後方の道から、水が入ってくる。

土を加えて止めようとしているが、吉ではない。

図を参照して、後の山林のそばから水溝を開いて流去すべきである。そうすれば吉に転じる。

7-10. 番所の四方路……番所は四方道に囲まれている。

しかし、おそらく障りはないと思われる。

7-18. 浦下山……樹が生い茂っている。吉ではない。

図を参照して、樹を伐採し、村中の水を導水し、そこに流し入れるべきである。そうすればもっとも吉である。

以上が四カ村の共通項目ならび、相違点の概要となる。風水師による巡見の手順には、一定の規則性があることも浮かびあがってくる。その見分手続きを箇条書きにあらわすと以下のように示されよう。

1. 絵図を検討する
2. 当該村の調査項目と照らし合わせる
3. 各項目に関して風水における定説を述べる
4. 調査対象となる地区の現状を現地に赴いて見分する
5. 吉凶の判断およびその理由を述べる
6. 風水の法に則って具体的な改善策を述べる
7. 改善すれば「吉」となることを述べる

おわりに

本来、「風水」と「祭祀」は、近世琉球弧の村落社会を構築する上で欠かすことのできない要素として意識されてきた。本稿ではそのうちの「風水」に着目して、論考を進めてきた。

風水は人々が衣・食・住を獲得するためのフィールド（生活空間）を形成する技術として用いられた。今回は割愛したが、一方で祭祀は、その日々の営みを精神面から支える役割を担った。とりわけ八重山諸島の人々は、この二つの要素が円滑に作用したとき、はじめて豊穡の「世（ユウ）」がもたらされると考えてきたのである。

風水はまた、科学的な「地理の法」として活用された経緯がある。この思想と技術は紀元前の中国で生まれ、

10世紀には東アジア全般に普及した。近世の琉球国でも、古地図の形跡から、14世紀以前には風水が導入されていたと推測されている。

それを国策としてさらに推奨した人物に、三司官の蔡温（1682～1762年）がいた。蔡温は留学生として渡唐した際に「地理（風水）」を学び、執政に就いた後も、土木事業でこの技術を活用した。八重山でも屋敷や墓の選定から村の区画、道路の舗装、灌漑用水の設置、樹木の植栽等に至るまで、生活空間のありとあらゆる場面において、風水が用いられた。その技術は生活の危機に直面した際、もっとも重視された。

「なにかがおかしい」「不快感がある」「風水害にみまわれた」、そうした生命体の不調を気や風、あるいは水の流れに最大限の注意を払うことにより、改善しようとする試みこそ、島嶼型風水（村落風水）の特徴であった。また、大陸のように恵まれた地相が必ずしも得られない島嶼社会では、植栽など、可能なかぎり「自然を活かす」の工夫も徹底された。

祭祀は、そうして形成された空間で営まれる暮らしの様々な要素が溶け込んでいた。祭りは生活を通じて得られる衣・食・住の「象徴」であり、死者と生者、あるいは「あの世」と「この世」をつなぐ「時」であり、あるいは、生命の循環を願う「場」として機能した。

琉球弧のシマ社会に深く浸透した風水および神々への信仰の基底には、人々を取り囲む「自然」への配慮と、畏敬の念が横たわっていた。この社会の人々は、その「地理」を尊重することにより、はじめて自らが生かされることを認識していたのである。

<引用・参考文献>

- ・石垣市史叢書2『与世山親方八重山島規模帳』1992年 石垣市史編集室
- ・石垣市史叢書7『翁長親方親方八重山島規模帳』1994年 石垣市史編集室
- ・石垣市史叢書9『参遣状抜書（下巻）』1995年 石垣市史編集室
- ・石垣市史叢書12『大波之時各村之形行書』1998年 石垣市史編集室
- ・石垣市史叢書13『八重山島年来記』1999年 石垣市史編集室
- ・石垣市史叢書14『富川親方八重山島規模帳』2004年 石垣市史編集課
- ・石垣市史叢書16『北木山風水記』2008年 石垣市史編集課
- ・『いしがきの地名（1）石垣市史研究資料—1』1989年 石垣市史編集室
- ・『八重山写真帖』2001年 石垣市史編集室
- ・『石垣市史 各論編 民俗 下』2007年 石垣市史編集課
- ・『2010年度 沖縄県立博物館・美術館 博物館特別展 海のクロスロード 八重山』2010年 沖縄県立博物館・美術館
- ・『沖縄大百科事典』1983年 沖縄タイムス社
- ・『沖縄の祭り』1991年 沖縄タイムス社
- ・『沖縄県史・各論編4「近世」』2005年 沖縄県教育委員会
- ・『近世琉球の租税制度と人頭税』2003年 沖縄国際大学南島文化研究所
- ・環境省総合環境政策局環境影響評価課
(URL：<http://www.env.go.jp/policy/assess/1-1guide/1-1.html>)
- ・木崎甲子郎・目崎茂和『琉球の風水土』1984年 築地書館
- ・喜舎場永珣『八重山民謡誌』1969年 沖縄タイムス社
- ・窪徳中『道教の神々』1996年 講談社学術文庫
- ・窪徳忠編『沖縄の風水』1990年 平河出版社
- ・齊木 崇人・浦山 隆一・渋谷 鎮明・那根 律子『『北木山風水記』の読解的研究 - 八重山・西表島祖納集落を事例に：東アジアの集落・居住空間研究23』1997年 『学術講演梗概集・E-2、建築計画Ⅱ、住居・住宅地、農村計画、教育』519・520頁 社団法人日本建築学会 所収

- ・ 斎藤斉「風水研究に関する主要文献目録和文・欧文編(刊年順)」517～532頁 1990年『史学』(第59巻・第4号)三田史学会 所収
- ・ 斎藤之誉「風水モデルを活用して景観秩序を解釈する地理学習 沖縄県小浜島と韓国公州市旧市街を事例にして」67～102頁 2009年『麗澤学際ジャーナル = Reitaku Journal of Interdisciplinary Studies』(第17巻・第1号)麗澤大学経済学会 所収
- ・ 坂本磐雄・江田知史「北木山風水記に基づく沖縄八重山地方集落の宅地道路条件の変容」1995年『沖縄文化研究21』所収 法政大学沖縄文化研究所
- ・ 崎山直「島々と海の総体」2000年『八重山の歴史と文化』所収
- ・ 新城敏男「宗教(2)―仏教の伝播と信仰― 宮良高弘編『八重山の社会と文化』1975年 木耳社
- ・ 新城敏男「八重山の村落風水」『史料編集室紀要第18号』1993年 沖縄県立図書館史料編集室
- ・ 新城敏男「近世八重山の諸相―八重山島規模帳解釈の基本として―」2002年 東京・八重山文化研究会
- ・ 新城敏男「先島統治をめぐる状況」『沖縄県史 各論編4 近世』2005年 沖縄県教育委員会
- ・ 鈴木正崇「八重山群島における時間認識の諸相」1991年 植松明石編『環中国海の民俗と文化2 神々の祭祀』所収凱風社
- ・ 住谷一彦・クライナー＝ヨーゼフ著『南西諸島の神観念』1977年 未来社
- ・ 玉城哲『水の思想』1979年 論創社
- ・ 陳碧霞・仲間勇栄「沖縄の風水集落景観に関する植生学的研究―多良間島を事例として―」2009年 琉球大学農学部学術報告
- ・ 椿勝義・坂本磐雄・北野隆「集落の風水史料及び古地図に基づく八重山地方の集落坐向:風水思想による沖縄の集落空間形成に関する研究 その1」1997年『日本建築学会計画系論文集・第500号』213～220頁 社団法人日本建築学会 所収
- ・ 椿勝義・坂本磐雄・北野隆「『北木山風水記』及び集落古図の分析:沖縄八重山地方集落の道路配置及び形状に及ぼした風水思想の影響 その1(歴史・意匠)」2003年『日本建築学会研究報告、九州支部、3、計画系』453～456頁 所収
- ・ 都築晶子「近世沖縄における風水の受容とその展開」『沖縄の風水』1990年 平河出版社
- ・ 都築晶子「龍のひそむ島―近世琉球の風水―」『沖縄県史 各論編4 近世』2005年 沖縄県教育委員会
- ・ 得能壽美『近世八重山の民衆生活史―石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク』2007年 榕樹書林
- ・ 仲間勇栄「柚山と村落共同体」『新琉球史 - 近世編(下) -』1990年 琉球新報社 所収(109頁)
- ・ 仲俣均「風水ブームとその行く末」46～51頁 1993年『地理・風水思想(特集)』所収
- ・ 中松弥秀『神と村』1975年 伝統と現代社
- ・ 仲村誠司「山原の村落風水と風景」2000年『建設情報誌・しまたていNo.11』6～9頁 一般社団法人 沖縄しまたて協会所収
- ・ 前城直子「他界と方位(その2)―陰陽五行思想の展開―」1989年『沖縄文化研究15』所収
- ・ 松島泰勝『琉球の「自治」』2006年 藤原書店
- ・ 三浦國雄『琉球弧叢書10 風水・暦・陰陽師:中国文化の辺縁としての沖縄』2005年 榕樹書林
- ・ 三木健『オキネシア文化論―精神の共和国を求めて』1988年 海風舎
- ・ 皆村武一『村落共同体 崩壊の構造』2006年 南方新社
- ・ 宮内貴久『風水と家相の歴史』2009年 吉川弘文館
- ・ 宮内貴久「風水ブーム再考(セッションI 都市・村落・住居・墓地の風水:史資料からみる風水の実態,第12回国際日本学シンポジウム:都市・建築・空間の国際日本学)」7～13頁 2011年『比較日本学教育研究センター研究年報・第7号』お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター 所収
- ・ 目崎茂和『図説 風水学―中国四〇〇〇年の知恵を探る』1998年 東京書籍株式会社
- ・ 目崎茂和「風水・風土・水土」『沖縄の風水』1990年 平河出版社
- ・ 山下惣一『農から見た日本―ある農民作家の遺書―』2005年 清流出版
- ・ 渡邊欣雄「沖縄の風水史」2004年『沖縄文化97』所収 沖縄文化協会

- ・渡邊欣雄『風水の社会人類学 — 中国とその周辺比較 —』2001年 風響社
- ・渡邊欣雄『風水思想と東アジア』1994年 人文書院

<図版出典> ※引用・参考文献に詳細

- 図1. 「八重山群島全図」 [※ 出典：牧野清『明和の大津波』1981年、城間印刷]
- 図2. 石垣島大字区界 『石垣市史研究資料-1 石垣の地名』1989年
- 図3. 旧石垣村の区割り 図2に同じ 石垣市役所総務部市史編集室
- 図4. 鳩間村の通耕図(18-20) [※ 出典：得能, 2007年]
- 図5. 沖縄における高島低島の風水の村落モデル ※出典：目崎, 1998